

聖書：創世記 24：29～67

説教題：リベカを迎えて妻とし

日時：2023年11月26日（朝拝）

イサクの結婚に関する創世記24章。28節までの部分を2回に分けて読みましたが、今日は残りの部分を一気に見たいと思います。先ほどの朗読でお分りの通り、今日の箇所にはこれまでの内容をもう一度語り直す部分が多く含まれています。アブラハムはすでに妻サラを失い、息子はイサク一人でした。そのイサクを通して神はアブラハムの子孫を大いに増やすと約束されました。そこで緊急の課題となって来るのは息子イサクの結婚です。アブラハムは周りに住むカナン人からではなく、私の国、私の親族のところへ行ってイサクに妻を迎えよと家の最年長のしもべに命じました。その際、イサクをアブラハムの出身地に連れ戻してはならないこと、彼は神が与えたこの約束の地にとどまるべきこと、従ってイサクの妻となる人は同じ信仰に立ってこの地に来る人でなければならないことについてアブラハムは命じました。しもべは祈りをもって事に当たり、神の不思議な導きにより、イサクの妻となるべき人リベカを見出しました。今日はその続きです。

しもべにはまだ大きな責任が残っています。それは彼女の家に行って家族の承諾を得、またリベカ自身の同意を得ることです。リベカが家に戻り、アブラハムのしもべとのやり取りを告げると、リベカの兄ラバンが迎えに出て来ます。このラバンは後に創世記 29～31 章に再び出て来ますが、そこから分かることはずる賢い人、また計算高い人ということです。ここでも彼がアブラハムのしもべを急いで迎えに行った理由として30節に「彼は、飾り輪と、妹の腕にある腕輪を見」とあります。ラバンは31節で「どうぞ、おいでください。主に祝福された方。なぜ外に立っておられるのですか。私は、お宿と、らくだのための場所を用意しております」と言ってアブラハムのしもべを迎え入れ、らくだには飼料を、また彼とその従者には足を洗う水を与え、食事を提供しました。しかししもべは「私の用件を話すまでは、いただきません」と言います。自分の必要や慰めよりも使命遂行を優先するしもべの姿があります。そしてその後しばらくは前回までの内容を語り直した部分となっています。今日の私たちからすると冗長と思われるかもしれませんが、当時朗読されたものを聞いて聖書のメッセージを受け取った人々にとって、このような繰り返しはむしろインパクトを与えるもの、大事な点をよりはっきり浮かび上がらせるものだったでしょう。以下、彼の要

点をまとめてみます。

まず彼が話したことはアブラハムが神によってどんなに祝福されているかということ、その彼の息子に妻を迎えるために私は遣わされたということです。その際、イサクは約束の地カナンを離れてはならないこと、従って相手の人がカナンの地に来ようとしなければその人は御心の人ではないこと、あなたは事柄全体を導いてくださる神に信頼して行きなさいとアブラハムに言われたことについて話しました。

次にしもべは祈りつつ事に当たったことを述べました。イサクの妻にふさわしい特性をあげ、その人が分かるようにしてくださいと主に祈った。するとリベカが現れて、まさにその通りの姿を見せてくれた。私に水を飲ませてくれたばかりか、一緒にいたらくだのことも気にかけて自発的・積極的に助けてくれた。そしてどの家の娘さんかと尋ねたところ、何とアブラハムの兄弟を先祖に持つ人であると知って神を賛美したことをしもべは述べました。

そして彼は49節でリベカの家の人たちに問います。「それで今、あなたがたが私の主人に恵みとまことを施してくださるのなら、私にそう言ってください。もしそうでなければ、そうでないと私に言ってください。それによって、私は右か左に向かうこととなります。」彼は自分が確信しているからと言って自分の結論を相手に押し付けることはしませんでした。相手の考えを尊重して耳を傾けました。もし主の導きの下にあるなら相手も受け入れてくれるでしょう。しかしそうでないなら、そうでないとはっきり言ってくださいと言います。その場合、リベカは御心の人ではないことになり、別の人を求めることとなります。しもべは主に信頼し、主の導きを見て取ろうと身を低くしました。

このようなアブラハムのしもべの証しと問いかけに対してリベカの家族はどう応答したのでしょうか。50～51節にラバンとベトエルが次のように答えたとあります。

「主からこのことが出たのですから、私たちはあなたに良し悪しを言うことはできません。ご覧ください。リベカはあなたの前におります。どうぞお連れください。主が言われたとおりに、あなたのご主人の息子さんの妻となりますように。」ベトエルの方が父ですが、ラバンの後に名前が書かれていること、また終始ラバンがリーダーシップを取っていることから、父ベトエルは高齢で、家の責任はラバンが取ることにな

っていたと考えられます。二人はしもべの話を聞いて主の導きと受け止め、同意しました。アブラハムのしもべはこれを聞くや否や、地にひれ伏して主を礼拝します。そして銀や金の品物や衣装を取り出してリベカに与え、彼女の兄や母にも貴重な品々を贈りました。そうしてから提供された食事を食べ、寛ぎました。

次の日、しもべはさっそくアブラハムのところへ帰ろうとします。すると彼女の兄と母は「娘をしばらく、十日間ほど私たちのもとにとどまらせて、その後で行かせるようにしたいのですが」と言いました。後のラバンからすると、さらに何か利益を得ようとしたのではないかと考えたくもなりますが、ここはそこまで見なくても良いかもしれません。今日リベカが出発したら、もう地上では会えないかもしれない。昨日結婚話が持ち上がって今日娘が去るのではあんまりである。せめて数日は・・・という願いは自然であったと言えるかもしれません。しかししもべは急ぎます。事を伸ばすことは危険であると思っていたのかもしれませんが。あるいは高齢のアブラハムに一日でも早く朗報を届けたいと願ったからかもしれません。それで意見が分かれたため、リベカの家族は、娘の気持ちを聞いてみましょうと言います。そうして呼ばれたリベカは何と答えたのでしょうか。「この人と一緒に行くか」と尋ねられた彼女は 58 節で「はい、行きます！」と言いました。これが決定的な言葉となります。そしてここにリベカの性質が示されていると言えます。

彼女はカナンがどんな地なのか、見たこともありませんし、知りませんでした。またイサクがどんな人なのか、アブラハムのしもべを通していくらかのことを知ったとは言え、その姿を見たことはありませんし、詳しいことは分かりません。そんな彼女は「行くか」と尋ねられて、「はい、行きます」と言いました。これは誰かに似ていないでしょうか。それはアブラハムですね。アブラハムは創世記 12 章 1 節で「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい」と神から言われました。ヘブル人への手紙 11 章 8 節には、この召しを受けた時に、アブラハムは「それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました」とあります。リベカもこれにそっくりです。これから向かう地は知らない土地です。そこに行くためには生まれ育った地を離れなければなりません。しかし彼女はアブラハムのしもべの話を聞き、主を信じて、「行きます！」と答えました。アブラハムに似た信仰がここに見られます。そういう意味で彼女は「女アブラハム」と言われます。

そこでリベカの家族は祝福の言葉をもって彼女を送り出します。60 節：「われらの妹よ、あなたは幾千万にも増えるように。あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」この言葉はどこかで見たことがないでしょうか。これは創世記 22 章 17 節の神の言葉とそっくりです。アブラハムがイサクを献げた後、神がそれまでの約束を更新して言われた祝福の言葉です。この類似はどう考えたら良いでしょうか。35～36 節でもべはアブラハムが神から豊かに祝福されていることを語りましたが、そこに書かれていたのは彼の話の要約であり、実際はもっと詳しく話したと思われます。彼はアブラハムが受けた祝福は単なる物質的祝福ではなく、神との契約関係において与えられた祝福であること、そしてその説明の中で神が語った 22 章 17 節の言葉なども話したのではないかと思います。そういう神とアブラハムの生きた関係についての話を聞く中で、先のリベカの「行きます！」という信仰の応答もあったのだと思います。そして彼女の家族も、その神の言葉を映し出すかのように同じ言葉をもって、イサクの妻となるリベカの上に神の祝福があるように！と祈ったのではないのでしょうか。こうしてリベカはカナンの地に向かって出発します。

さて 62 節以降はいよいよイサクとリベカの結婚です。ここにもこの章全体を支配している神の摂理の御手が、そのように明記されていなくても、生き生きと働いている様子を私たちは見ます。イサクはこの時、ベエル・ラハイ・ロイ地方から帰って来ていました。もしそうでなければ、このタイミングでリベカと会うことはありませんでした。ここにも神のお導きがあります。彼は夕暮れ時、野に散歩に出かけました。この言葉はどう訳すべきか意見の分かれる言葉です。ある人は「黙想するために野に行った」と訳し、他の人は「祈るために野に行った」と訳します。そしてイサクは母が亡くなった後の心の傷が癒されるために野で瞑想していたとか、あるいは妻を探しにしもべが出かけていることを知り、その導きのために祈っていたのだろうなどと言われます。そんな彼が目を上げて見ると「ちょうど」らくだが近づいて来ていました。リベカもその時、目を上げてイサクを見たとあります。これも神のタイミングです。リベカはラクダから降ります。相手への敬意を示すためです。そして「野を歩いて私たちを迎えに来る、あの方はどなたですか」と尋ねます。しもべは「あの方が私の主人です」と答えます。そこでリベカはベールを手にとって身をおおいました。イスラエルでは通常、女性はベールで身をおおうことはしなかったようですが、婚約者の前ではおおうのが礼儀だったようです（雅歌 4 章 3 節、6 章 7 節）。そしてしもべはイサクに自分がして来たことを残らず話しました。イサクはそれを聞いて受け止めたので

しょう。

イサクは母サラの天幕にリベカを連れて行きます。これはサラがこれまで占めて来た位置をリベカが継ぐ人となることを象徴するものでした。イサクはリベカを迎えて妻とし、彼女を愛したとあります。主の導きのもと、二人はこうして結婚しました。最後に「イサクは、母の亡き後、慰めを得た」とあります。これはリベカが母親の代わりになったという意味ではありません。たしかに年寄り子として自分を生み、育ててくれた母を失ったことはイサクにとって大きな悲しみだったでしょう。しかし彼は結び付くべき妻と結ばれることによって真の慰めを得たのです。創世記 2 章 24 節：「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」人は母とではなく、妻と結び付くようにと神によってデザインされました。イサクはこの結婚においていわば一人立ちし、神が備えてくださった結び付くべき人と結ばれたのです。そこに大きな慰めと安らぎ、幸いと喜びを得たのです。こうしてこのイサクとリベカがアブラハムとサラに代わって神の約束を担う夫婦として誕生したことが記されています。

以上の創世記 24 章。これは単なる結婚のおめでたい話ではありません。この章に一貫して流れているテーマはこれです。御言葉において約束を与えた神は、それを果たすために必要なものを必ず備えてくださる。イサクの結婚は一見困難な課題でした。約束の地にとどまって、果たしてどのようにして同じ信仰に立つ人と神の約束を担う者となれるのか。それに対してこの章は主がイサクの結婚相手をきちんと備えていてくださったことを語っています。それは何と遠い地に住む人でした。遠い地にいたりベカこそ神がイサクの妻として備えていた器でした。その神が備えた人を幸いなことに見出し、その人と結ばれたというのがこの創世記 24 章です。そのために必要とされるのはまず信仰です。神の御言葉から外れないことです。とにかく結婚を！と急ぐあまり、基準を緩めるようなことをアブラハムはしませんでした。妥協しませんでした。約束に忠実な神は必ず備えてくださる。その神を仰いでアブラハムもしもべもイサクも神が定めている枠を踏み越えず、その条件内にとどまりました。そしてあわせて必要とされたのは祈りでした。主に信頼している者として主に祈ること。その時に人間の思いを超える仕方で、神はご自身が備えた祝福へ導いてくださったかがこの章に描かれて来ました。一つ一つの動きに神の摂理がありました。そうして見出したリベカは信仰の人でした。皆が見守る中、彼女は「はい、行きます」と明快に答えまし

た。アブラハムを彷彿とさせるような人でした。

私たちも同じです。主は今日も摂理の御手をもってすべてを導いておられます。私たちも色々な状況にぶつかって難しいと思う時が多々あります。その中でみことばをそのまま守るとうまく行きそうにないと考えて、その基準を勝手に緩めようとする誘惑にさらされます。しかし私たちの目にうまく行きそうに思われるとか思われまいという事は私たちにとって関係のないことです。私たちに求められていることは、ただ神を信じ、御言葉に従って歩むことだけです。神の主権を信じて、祈りつつそうすることです。そうする時に神が備えている祝福と解決に私たちはあずかる者とされるのです。これは信仰によって従う歩みをしなければ分からないことです。最初からその答えが見えているわけではありません。アブラハムも主を信じて、主が指示された山に上り、その山の上に主の備えがあることを発見しました。今回のイサクの結婚においても、主を信じて御言葉に従うことを第一とし、その点は譲らずに取り組んだ先に奇しい主の備えがあったことを見出しました。神は今日も備えてくださる神です。私たちもその主を信じて、主に従い、主の備えを見出す者とされたいと思います。私たちの思いをはるかに超えて主が備えてくださったものを受け取り、そのことで神を賛美し、神を益々喜ぶ歩みへ進む者とされたいと思います。箴言3章5～6節：「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」